

「日本その日その日」 モース

相撲見物

2013年11月 15日

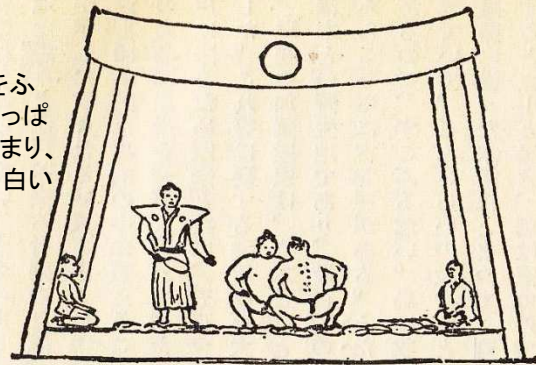
明治維新から9年後の1877年6月18日、モース(米国の動物学者 1838-1925)はサンフランシスコから船で17日間の船旅で横浜に上陸した。

彼は日本滞在中の自らの体験を克明にスケッチつきの日記帳(3500ページ)に書き残している。

モースは横浜から新橋に向かう車窓から「大森貝塚」を発見した学者として知られる。人類学の祖先。

行司のことを、「厳格な顔をして、派手な着物を着た男がアムパイアの役をする」と書き残している。

仕切りのことは、「巨大な肥えた相撲取りが円場にあらわれ、脚をふんばり、まるで試験をするように両脚を上下したり、力いっぱいひっぱいたりしたのち、さて用意ができると顔つきあわせて数分間うずくまり、お互いに相手の筋肉を検査する有様は、まことに物珍しく且つ面白い観物であった。」と書いている。



周囲の光景がすでに面白い。小さな茶屋、高さ十フットばかりの青銅の神様若干、それから例の如き日本人の群集。我々は切符を買った。長さ七インチ、幅二インチ半、厚さ半インチの木片で漢字がいくつ

図-13

か印刷してある。興行場は棒を立て、たるきを横に渡した場所に、天井に簾(びしり)を使い、壁もまた席で出来ていた。粗末な棧敷、というよりも寧ろ棧敷二列がこの建物の周囲をめぐっている

のだが、これもまた原始的なものであった。その中心に柱が四本立っていて、その間は高くなつており、直径二十フットもあろうかと思われる円場(どよ)の上に赤い布の天蓋を持って乗っている(図13)。柱の本ずつに老人が一人ずつ坐っているのは、何か審判官みたいなものであるらしい。また厳格な顔をして、派手な着物を着た男がアムパイアの役をする。巨大な、肥えた相撲取りが円場にあらわれ、脚をふんばり、まるで試験をするように両脚を上下したり、力いっぱいひっぱいたりした後、さて用意が出来る」と顔つきあわせて数分間うずくまり、お互に相手の筋肉を検査する(彼等は犢鼻褌をしている丈である)有様は、まことに物珍しく且つ面白い観物であった。いよいよ準備が出来ると二人は両手を土につけ、そこで突然飛びかかる。円場から相手を押し出すか投げ出すかするというのが仕業なんである。この闘争が非常に短いこともあり、また活発で偉大なる力を見せたこともある。時としては単に円場から押し出

17 1877年の日本——横浜と東京

され、時としては恐ろしい勢で投げつけられる。ある相撲取りは円場から投げ出されて、頭と肩とで地面に落ちた。立ち上ったのを見るとそこをすりむいて血が流れていた。私がふり向いて見物人を見ることが出来るように、我々は円場に近く接近して坐った。場内は柄穴を持つ横木で、六フット四方位の場所にしがられている。これがボックスなので、そのしきりの内の場所は全部あなたのものである。見物人のあつた。日本人たちが不思議そうに、ウィルソン教授の八つになる男の子を眺めるのを見ることは、私にとっては、他のいずれの事物とも同じ位興味があつた。この可愛らしい子供は、相撲がよく見えるように、例のかこいの一方に腰をかけていた。見物人が全部膝を折って坐っているのにハリイだけが高い所にいるのだから、彼等は一人のこらず彼を眺めることが出来た。彼の色の濃い捲毛と青い目とは、まだ外国人が珍しい東京にあつては、まっかな目玉と青い頭髪が我々に珍しいであらう程度に、不思議なものなのである。所で、この色の白い、かよわそうに見える子供は、日本語を英語と同じようによく話す。彼がお父さんのために後をむいて、演技のある箇所を質問し、そしてそれを英語で我々に語った時の日本人たちの驚きは非常なものであった。彼が自分たちの言葉を話すと知った日本人たちのうれしそうな顔は、まことに魅力に充ちたものであった。私は相撲を見ている間に、何度も何度も、彼等の感嘆した顔が見たいばかりに、ハリイをして日本人にいろいろな質問を寄せしめた。相撲取りたちは非常に大きくて、力が強かった。ある者は実に巨大であつた。

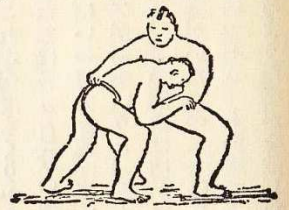


図-14